

コミュニケーションの構造

—記号とメディアの関係について—

元 濱 涼 一 郎 *

The Structure of Communication

—On the relationship between the sign and the medium—

Ryōichiro MOTOHAMA

序

コミュニケーションをメッセージの伝達の単なる成否の範囲に限って考察することは、現在でもなお一般に行われているが、その限界については我国でも指摘されたことがないわけではない。「負のコミュニケーションの生産性¹⁾」(山本明)、「誤解する権利」(鶴見俊輔)などの主張は、その代表的な例であろう。しかしその一方で、こうした議論が体系化されることもなく推移したというのも現在までの趨勢である。これには様々な理由があるに違いないが、本質的にはメッセージ(内容)の伝達の成否が一般に極めて制約された意味での言語(意図)としてしかとらえられず、コミュニケーションの形式的、構造的側面についての必要な関心を欠いていたことに由来する結果であると筆者は考える。

しばしば、記号がコミュニケーションそのものをカッコに入れる形で論じられる為に、コミュニケーションの契機としての記号については十分な顧慮がなされてきたとは言えないし、また、メディアも、それが新聞、テレビなどマス・メディアを指示する言葉としてもっぱら使われ、それらと殆んど同義のものとして扱われてきた言語習慣の結果、メディアがメディアであるのは、常に主体との関係に於いてであり、それが特定のモノに排他的に附与された属性ではないということが自覚されることは甚だ稀れである。つまり、記号論もメディア論も相互に無関係に、或はコミュニケーションという暗黙の前提に依拠して、それぞれ一人歩きをしているというのが、おおよその現状である。

必要なのは、記号論とメディア論をコミュニケーション論に位置づけることであり、それには、メッセージの内容ではなく、その形態としての記号と、その媒体としてのメディアとの関係を解明することである。「コミュニケーション論からメディア論へ²⁾」ではなくて、コミュニケーション過程の中で適切に位置づけられた記号とメディアの探究、及びその統合とが本質的な問題なのである。

本稿は、このような課題に応えるために、先ずコミュニケーションの構造研究に関する現状認識、次いで記号とメディアに関するその分析の二部から構成される。

* 社会学研究室(昭和62年9月30日受理)

I. 認識

I-1

コミュニケーションという言葉は、かなりあいまいに使われているが、一般には、言語的、非言語的手段及びその両者を介してする情報伝達を意味するように思われる。また、情報の発信者、受信者の双方がともに行動の主体ととらえられるときには、トーマス・A・シービオクの適切な表現、「コミュニケーションというのは、もっとも重要な意味で、生命あるものをないものから区別する規定的特徴と見做すのがいちばんよい³⁾」を想起することが出来る。

コミュニケーションには、生命をもった主体、客体と伝達さるべき内容(メッセージ)及び、そのメッセージを表現するための環境、即ち主体、客体を同時に含む客観的世界という手がかりが必要である。アルフレッド・シュッツの表現を借りれば、「コミュニケーションは、外的世界の現実性のうちに於いてのみ生じうる。⁴⁾」のである。

コミュニケーションについての、このような原理的考察の基礎は、つまるところ他我認識の方法の如何にあるが、直接にそれに依拠したシュッツも指摘するように、それに関してはもっぱら、エドムント・フッサールに負っている。

彼は、「あらゆる対象的なもの、およびその中で見い出されるものをもっぱら意識の相関項として研究すること⁵⁾」を標榜しているが、一方で、「意識対象は決して完結的所与として現前しているものではない⁶⁾」から、我々が直接知覚できるもの(顕在的意識)は対象の一部にすぎないのに、我々はそれを通じて対象そのものの意味(意識対象)を統覚することができる指摘し、こうしたことが可能になるのは対象が位置づけられるべき地平(潜在的意識)との関係に於いてであると説明して、これを間接的呈示と呼んだ。更に進んで、彼は他我が、自我の身体との類比と感情移入とによってそれと知られ、また自我と対関係にあることによって、つまり、「自我の変様態として現われる⁷⁾」ことによって客観的世界を基礎づけることが出来るとしている。

フッサールの議論に飛躍があるという事実⁸⁾を否定することは出来ないが、しかし、彼が人間の身体(拘束)性に着目して、これを他我認知の契機としたこと、そしてそこから自我と他我との媒介過程を説明し⁹⁾、ひいては記号の置かれるべき位置を適切に指示する結果になったことは、他の何にもまして重要である。

I-2

コミュニケーションとはメッセージ交換のことであり、いかなるメッセージも記号形態をとるが、それはいつでも何らかの程度で体系化されている。この事實は、誰よりもフェルディナン・ド・ソシュールによって指摘され、彼自身によって、「社会生活のさかなにおける記号の生を研究する科学¹⁰⁾」、すなわち記号学(sémiologie)として構想されることとなった。そこでは言語学もその一部門に止まるとされている。同様に、ローマン・ヤコブソンも指摘する、「如何なるコミュニケーション・レベルを考察対象としようとも、それらの一つ一つは、すべて何らかのメッセージ交換を包含しているが故に、記号レベルから切り離しては取り扱えない¹¹⁾」。

しかし同時に、二人がともに留保するように、あらゆる記号レベルのなかで言語にその主要な役割があてがわれているという事実を忘れてはならない。というのも、「人類にとっては、どの伝達体系も言語と関連し合っ¹²⁾」いるからであり、また、「どんなメッセー

ジの構成要素も内的関係によってコードと、外的関係によってメッセージと必然的に結びついて¹³⁾おり、そこには高度の体系性と、従って学習可能性が備わっている必要があるが、言語以上に、その要件を備えた記号体系の存在を我々は知らないからである。ロラン・バルトに至っては、ソシュールをひっくり返して、「言語学が記号の一般的な学の一部...
 なのではなく、記号学が言語学の一部門なのである¹⁴⁾」、とまで主張するほどである。

このように、記号体系の中での言語の特権的、或は戦略的重要性という認識のもとでは、言語メッセージの伝達の分析をもって、記号体系一般の分析に着手することについて、さしたる障害を認める必要はないであろう。

言語メッセージについての体系的分析は、ヤーコブソンによって、何よりも詩的言語について為された。彼によれば、あらゆる発言現象、あらゆる言語伝達に含まれる構成要因は以下のように定式化できる。すなわち、

「発信者 addresser は受信者 addressee にメッセージ message を送る。メッセージが有効であるためには、第一に、そのメッセージによって関読されるコンテキスト context...が必要である。これは受信者がとらえることのできるものでなければならず、ことばの形をとっているか、あるいは言語化され得るものである。次にメッセージはコード code を要求する。これは発信者と受信者（言い換えればメッセージの符号化と復号化者）に全面的に、あるいは少なくとも部分的に、共通するものでなければならない。最後に、メッセージは接触 contact を要求する。これは発信者と受信者との間の物理的回路・心理的連結で、両者をして伝達を開始し、持続することを可能にするものである¹⁵⁾。更に、ヤーコブソンによれば、「発信者」、「受信者」、「コンテキスト」、「メッセージ」、「コード」、「接触」というこれら六つの要因は、それぞれ互いに異なる六つの言語機能、即ち、心情的 emotive または 表現的 expressive 機能、動態的 conative 機能、関読的 referential 機能、詩的 poetic 機能、メタ言語的 metalingual 機能、交話的 phatic 機能を同じ順序で規定する。

言うまでもなく、メッセージの言語構造にあつては、これら六つの要因の各々は連動して働くのであるが（どの一つが欠けてもコミュニケーションは成立しないから）、その一方では、中での支配的機能に何よりも先ず依存する。要するに、言語機能に関しては、その階層的順位の相異が規定要因となることになる。このような認識に基づいて、彼は言語伝達の六つの基本的要因の図式と、これと対応する機能の図式、要因と機能との体系的連関を指摘した¹⁶⁾。（図1参照）

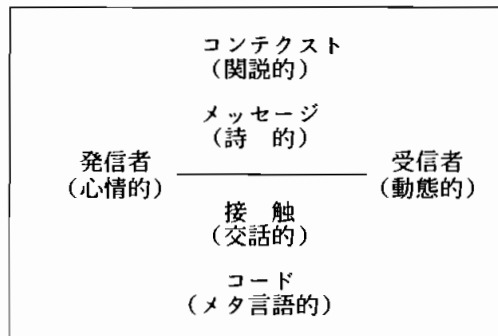


図1 E. Hohenstein, Jakobson より

ヤーコブソンは、誰もがもつコミュニケーション体験に背馳した、コミュニケーションをメッセージ（内容）の単なる機械的伝達ととらえる貧しいコミュニケーション研究の限界を単に指摘したというに止まらず、これを理論的に克服し、「多義性は自己に焦点を置くメッセージのすべてに内在する排除不可能な特質である¹⁷⁾。」という事実を、言語について正しく位置づけることに貢献した¹⁸⁾。

I-3

コミュニケーションは、言語的コミュニケーションと同義ではない。言語はコミュニケーション・システムの重要ではあるが、同時に、その全てではなく一部であることは常に想起される必要がある。何よりも、言語記号が機能しているときにも、同時にそれ以外の記号が補助的に働いている事実は、この間の事情を明瞭に示している。従って、コミュニケーションを理解しようとするれば、いずれコミュニケーション過程に於ける異なる記号間の階層性を明らかにする必要にまで到達せざるを得ないことになる。その前に、さしあたりコミュニケーション・システム全体を展望しながら言語を位置づけることが要請される。

コミュニケーションとは、つまるところ広い意味での交換である。結果が主体と客体の双方を何らかの程度で制約するという条件を満たしさえすれば、つまりその両者が交換によって新たに関係づけられ、また時には、その関係に修正が加えられるのであれば、交換の対象が何であるのかは、さしあたり問題ではない。交換されるものがどのような存在形態であろうとも、その本質はあくまでメッセージ交換である。そこでは、交換によって媒介されるものは、いずれ社会関係の生産と再生産に帰着する。換言すれば、交換は、クロード・レヴィ＝ストロースの指摘、「一つの社会はたがいにコミュニケーションをおこなう個人や集団からできている¹⁹⁾」という事実の表現形式であり、蔵内数太の言う、関係は未来的であり、集団は過去の的である²⁰⁾という事実の前提条件でもある。そこでは、発信者も受信者もともに社会構造上の焦点としての人間であり、社会なきコミュニケーションも、コミュニケーションなき社会も、ともに考えることは出来ない。

このような認識に立って、レヴィ＝ストロースは、「すべての社会でコミュニケーションは少なくとも三つの水準で展開される。すなわち、女性のコミュニケーション、財貨や労力のコミュニケーション、そしてメッセージ（言語）のコミュニケーションである²¹⁾。」と指摘した。これらがいずれもコミュニケーションであるという以上、これら三つの個別研究、親族体系を扱う社会人類学、経済体系に関する経済諸科学、言語体系を対象とする言語学には、ある種の類似が存在する。

レヴィ＝ストロースによれば、これら三つは「共通の世界の中で、各々の研究を位置づける戦術的水準に応じて異なっているだけ²²⁾」である。即ち、この三つの個別研究のいずれもが、ゲームの「規則」から成立しているという点で類似し、その尺度に関して異なっている。一見したところ、言語と女性というおよそ異質なものについても、彼は婚姻規則とその結果である親族体系について、これを個体および集団間のあいだのコミュニケーションを成立させるための操作の全体と見做すことが出来れば「伝達されるもの」が言語であるのか、女性であるのかという相異は、現象間の同一性を何ら損わないと主張する。

ただ「婚姻においてはコミュニケーションの主体と客体はほとんど同じ性質のものである（主体が男で、客体が女）のに対して、言語においては、話者がその言葉と同質のものになることは決してない²³⁾。」という違いは認められると付け加える。つまり、ここではこの対照的な二つの存在は、「人間」（女性）と「象徴」（言語）、「価値」（女性）と「記号」

(言語)という二重の対関係にある。そして経済交換は、この両者の丁度中間に位置するとされる。「財貨と労力は女性のように人間ではないが、音素とはちがってそれは依然として価値²⁴⁾」であり、また、「財貨と労力は、それ自体が...そのまま象徴でも記号でもないが、経済体系がある程度の複雑さに達したときから、財貨や労力を交換するために象徴や記号が必要²⁵⁾」になるからである。

社会という装置は、婚姻規則及び経済交換、言語交換に関わる諸規則が連動して働くときにはじめて稼動可能になるというのである。

こうして、レヴィ=ストロースは社会人類学、経済諸科学、言語学の連合からなるコミュニケーション科学を構想²⁶⁾することでコミュニケーション研究を方向づけた。その方向に従ってこれを展開したのはヤーコブソンである。

彼は音韻論の研究と講義を通じてレヴィ=ストロースに直接影響を与えただけでなく、レヴィ=ストロースの親族研究を介して、言語学もその一部であるコミュニケーション・システムについての共通の考察にと導びかれた²⁷⁾。実際、それは彼の詩学から言語学へ、更には記号論²⁸⁾への歩みを文字通りの意味で総合することとなった。

彼は、この領域、コミュニケーション科学に於けるレヴィ=ストロースの画期的な貢献を指摘しつつ、コミュニケーション研究とその階層性を次のように要約している。

彼によれば、記号学はコミュニケーション科学全体のなかで中心的な位置を占めており、その中心には記号学に関わる全ての分野の根底となる言語学を擁している。また、これを含む三つの総合科学は互いに包摂関係にあって、一般性へ向う三つの段階を示している。すなわち、

- (1) 言語メッセージの伝達の研究
- (2) メッセージ(言語メッセージを含む)の伝達の研究
- (3) 伝達の研究=社会人類学と共に経済学(メッセージの伝達を含む),²⁹⁾

さらには生命体そのものについての科学、生物学へと踏み出せば、生物間に於ける情報の転移までが含まれることとなり、それは記号の一般理論の領域のいっそうの拡張を促すことになるとされる³⁰⁾。(図2参照)

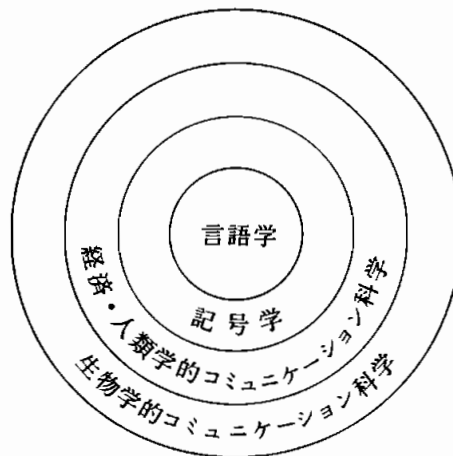


図2 E. Holoenstein, Jakobson より(一部、元濱補筆)

かくして、レヴィ＝ストロースによって提唱されたコミュニケーション科学は、ヤーコブソンによってその輪郭がほぼ明らかにされた。それは即ち、記号の研究である。シービオクが述べる³¹⁾ように、記号論はコミュニケーション体系についての科学的な研究を一括して行なう学問分野の名称となるのである。

Ⅱ．分析

Ⅱ－1

コミュニケーションの研究とは記号の研究であることが明らかとなった。では記号とは何か、またコミュニケーション過程に於ける記号の位置とはどのようなものであろうか。

ジュルジュ・ムーナンの言語学辞典³²⁾によれば、記号とは、「最も一般的な意味では、それ自身でない他の物を表わす物、形態、現象の一切のこと」である。

ところで記号が記号であるのは、あくまでもメッセージ交換の過程、つまりコミュニケーションの過程に於いてであるから、それは何らかの程度で感覚、つまり人間の身体性と結びついて現われる。従って、記号の本質的な検討はこの事実との関係でなされなければならない。これはほぼ同じ時期に、内的言語の領域に関して、フッサールとチャールズ・サンダース・パースによってそれぞれ独立になされた。

フッサールはその「論理学研究」のなかで、記号を単に何かを指示するだけの「指標」と、何らかの意図を伝達する「表現」に分け、更に、表情や身振りなど伝達意図を欠いた「表明」を区別した。しかし同時に、孤独な心的生活も「表現」であると指摘して、表現にとって本質的な作用、即ち意味附与作用によって内的言語の領域に於ける記号の存在を指摘した³³⁾。一方、パースは、外的事実を明晰に把握しようとするれば、必然的に記号を必要とすること、全ての思考は記号であり、人間の生活は思考の連続であるのだから、つまり人間は記号であると論じ³⁴⁾、また「人間の思考とは、人間の自分自身との対話にほかならない³⁵⁾。」と述べて、「内的発話は言語の通信網の中心的要因であり、個人の過去と未来との結びつけとしての働きをする³⁶⁾」(ヤーコブソン)ことを指摘している。

彼らはともに、記号が個人間(inter-personal)に於いてだけでなく、個人内(intra-personal)コミュニケーションに於いても機能すること、つまりメディアを伴う記号と伴わない記号が区別され、それによってコミュニケーションを分類することが出来ることを示唆している。従ってコミュニケーション過程に於けるメディアの概念を検討することは、コミュニケーションの性質の相異を明らかにするためにも必要である。

Ⅱ－2

本来、medium(メディウム)の複数形である media(メディア)は、現在ではもっぱらマス・メディアを指示することばとして使用されている。例えば、「新聞、ラジオ、テレビ、映画、出版物など情報の大量な伝播を支えるすべてのもの」(Robert 辞典)がメディアであり、また、メディアの権力³⁷⁾、メディアの所有などの言葉も既に市民権を得ているかに見える。

レイモンド・ウィリアムズによれば、こうした事態は、メディウムの三つの意味が漸次的に収斂された過程の結果である。すなわち、「(1)介在的または中間的働きもしくは実体という古い一般的な意味、(2)印刷物と media としての音と映像との区別にみられるような意識的な専門的意味、(3)新聞または放送一既存のもの、計画できるもの一を、例えば広告のように、なにかべつものに対する medium とみなす専門化された資本主義的な意味³⁸⁾」。

しかし同時に、彼は、「専門的意味の印刷物や放送が media なのか、それとももっと厳密に言って物的形式と記号体系なのかは論争の余地がある³⁹⁾。」と付け加えることによって、メディアという用語がなお流動的に使われ、概念上の結着がつかないこと、定義の余地を残していることを示唆している。

この問題の要諦は、メディアをマス・コミュニケーションにのみ関係づけるのではなく、それをも含むコミュニケーション過程に於て把握する必要にある。1950年代以降、とりわけ media が単数形で用いられるようになったことが示すように、誰の目にも明らかとなった巨大な物的・人的機構によって生じる、中井正一のいう「物理的集团的性格⁴⁰⁾」に目を奪われることなく、コミュニケーションの諸契機を検討する作業を通じてメディアを位置づけることこそが求められる。それはメディアがもつ社会構造の媒介機能を明らかにすることである。こうした観点からは、メディアがメディアであるのは行動主体相互の関係についてのみそうであり、メディアが特定のモノや対象に特権的に賦与された性質ではないこと、メディアはモノではなくて機能であり、従ってモノの属性ではないということに留意することが何よりも必要である。

例えば、柏木博は道具、就中家具をメディアととらえ、そのデザインと配置とが社会制度を媒介し、ひいてはその変化を規定する要因となることを、我国の明治以降について跡づけている⁴¹⁾。また、貨幣が言語に類似したシンボル体系であることは、カール・ポランニーによっても指摘されている⁴²⁾が、タルコット・パーソンズはそれに加えて、権力、影響力、価値コミットメントなどを、言語と同様、コードによって意味を与えられたシンボルの使用によるコミュニケーションの一般的媒体、つまり、交換の一般化された象徴的メディア (generalized symbolic media of interchange) であると主張する⁴³⁾。これらはいずれも社会制度や、またその現象形態である社会空間を規定する要因としてのメディアを指摘したものである。

このように、メディアが媒介するものが、社会空間であるのだとすれば、社会空間の性質に基づいてメディアを分類することが出来る。また、コミュニケーションが人間の身体性によって制約されるという事実からは、記号と同様メディアもその身体性の相異に基づいて分類されうるのであろう⁴⁴⁾。そこでは即ち、人間、身体、モノの各々がそれぞれどのような社会空間と関係するのかが問題となる。その各々は記号と結びつくことで、「人間」メディアの交換が社会そのものを、「身体」メディアは役割、地位などの社会的カテゴリーを媒介し、最後に「モノ」メディアは、「感覚とその拡張⁴⁵⁾」(マクルーハン)によって「身体」メディアを補完し、また社会構造の時間・空間的枠組を象る。一般化された象徴的メディアは、時間・空間の枠組(「モノ」メディア)に社会的意味を附与することによって記号が機能するための前提をなす意味空間を規定する。

II-3

メディアは人間の身体性と結びついて社会構造を媒介するが、しかし一方では、メディアはあくまでもコミュニケーション過程に位置づけられるときにだけメディアである。メディアは自立することが出来ず、記号を伴うときにのみメディアである。別離に際してハンカチーフを振ることは誰にも親しい出来事であるが、同じハンカチーフにロシア人が結び目を作るときには、それは備忘の標しとなる⁴⁶⁾。同じモノが異なるメディアとなる一方、メディアというメディアは存在しない。メディアは記号によって規定される。

記号については事情は異なる。内的対話にあっては記号はメディアを伴わない。従って、

メディアはいつでも記号の存在を前提にしなければならないという事実の結果、メディア論は限られた範囲でしか自立できず、記号論との関係でのみ体系的検討の対象となりうる。

また、どちらかといえば記号に我々の注意が先ず向けられ、メディアに人々の関心が殆んど向けられないという事実⁴¹⁾にも、しかるべき理由があるのである。シービオクが指摘するように⁴²⁾、記号概念はストア哲学から現在に至るまで、知覚可能な部分と理解可能な部分、記号表現と記号内容とからなると考えられて基本的には安定しているのに、メディア概念がそれと対照的に流動的であるのは、その間の事情を示唆していると言えよう。

即ち、知覚可能な部分は、同時に二方向に表示されえない。記号とメディアとは決して同時に知覚されない。記号は表示機能を、メディアは媒介機能をもつが、この二つは経験的には分離ができず、その結果、もっぱらコミュニケーションは記号の符号化と復号化と意識されることになるからである。これはまた、記号はメディアなしにも存在しうるが、メディアは記号を伴うときにのみメディアであるという事実の反映でもある。こうして一方で、記号とメディアの概念上の混乱を、また機能と存在形態の混同によって、メディアをしてモノに附与された性質であるかの如き幻想を人に与え、また他方、媒介すべきもの(記号)なしにもメディアが存在しうるかのような誤解に人を導くこととなるのである。

結 語

本稿は、コミュニケーションについての理論的枠組を、その構造に関して概括的に整理することをもっぱらその目的としている。

記号論やメディア論がコミュニケーション理論の中に正しく位置づけられず、また記号とメディアの概念上の区別さえ、ときに曖昧であるという現状では、これは最低限必要な作業であった。なお、本稿の構成上、削除せざるを得なかった部分、記号とメディアの具体的領域⁴³⁾での検討については、稿を改めることとした。

註

- 1) 山本明,「負のコミュニケーション」『コミュニケーション思想史』所収 1973年 研究社 参照
- 2) 中野収,「コミュニケーション論からメディア論へ」,『メディアと人間』所収 1986年 有信堂 参照。この中で著者は、「西欧産コミュニケーション科学」の限界を、それが極めて狭い「理解」に制約されていることにありと指摘し、これに對置するに、メディア(著者によれば、記号・ことば・情報の総称)との対話を提唱しているが、Roman Jakobsonの「多義性は自己に焦点を置くメッセージのすべてに内在する排除不可能な特質である」という言や、内的対話についての Charles Sanders Peirce の考察、Georges Mounin のいう「意味作用の記号学」など発信者を欠いたコミュニケーションに対する「西欧産コミュニケーション理論」の関心・貢献を考慮してみると、著者による「西欧産コミュニケーション科学・理論」の評価は妥当なものとはいえないであろう。
- 3) トマス・A・シービオク,「コミュニケーション, 言語, 言葉の系統発生について」『自然と文化の記号論』所収 1985年 勁草書房 173頁
- 4) Alfred Schutz, "Symbol, Reality and Society," in Lyman Bryson and others (ed.), *Symbol and Society*, 1955, p.169
- 5) エドモンド・フッサール,「デカルト的省察」,『世界の名著—ブレンタール, フッサール』, 1970年 中央公論社 230頁

- 6) フッサール前掲書 227頁
- 7) フッサール前掲書 304頁
- 8) とりわけ、彼の感情移入 (Einfühlung) 説に関して。これについては、木田元『現象学』(岩波新書) 1970. VIなどを参照
- 9) これがメルロ・ポンティに引きつがれたことは、よく知られている。これについては拙稿「社会記述の方法論的基礎」(修士論文) 関西学院大学 社会学部 1974年を参照
- 10) Ferdinand De Saussure, Cours de Linguistique Générale, Payot, 1983, p.33
- 11) Roman Jakobson, Language in Relation to Other Communication Systems, in Selected Writings II, Mouton 1971 pp698-699 米重文樹訳, 「他のコミュニケーション体系との関係における言語」, 『ヤーコブソン選集2』所収, 大修館書店 1978年 135頁
- 12) Roman Jakobson, Linguistics in Relation to Other Sciences, in Selected Writings II, Mouton 1971 p673 村崎恭子訳「言語学と隣接諸科学」, ローマン・ヤーコブソン『一般言語学』所収, みすず書房 1973年 246頁
- 13) Roman Jakobson, Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances, in Selected Writings II, Mouton 1971 p244, 田村すゞ子訳「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」『一般言語学』所収, みすず書房 1973年 27頁
- 14) ロラン・バルト, 沢村昂一訳「記号学の原理」『零度のエクリチュール』所収, みすず書房 1971年 94頁
- 15) Roman Jakobson, Linguistics and Poetics, in T. A. Sebeok (ed.) Style in Language, M.I.T. Press 1960 p353, 八幡屋直子訳「言語学と詩学」, 『一般言語学』所収 みすず書房 1973年 187-188頁
- 16) この過程については、エルマー・ホーレンシュタインの詳細な説明を参照(ホーレンシュタイン, 『ヤーコブソン—現象学的構造主義』白水社 1983年 194-210頁)
- 17) Roman Jakobson, Linguistics and Poetics, in T. A. Sebeok (ed.) Style in Language, M.I.T. Press 1960. pp370-371, 八幡屋直子訳「言語学と詩学」, 『一般言語学』所収, みすず書房 1973年 211頁
- 18) 勿論、ヤーコブソンのこのような議論に批判がないわけではない。例えば、突出した批判者としてジャン・ボードリヤールを挙げることが出来る。彼は、ヤーコブソンを名指しで楯玉に挙げて、発信者、受信者の二項からなるコミュニケーションの公式について、二項の間に相互関係もなければ影響もなく、人為的に分離され、対象化されたメッセージとコードによって規定されていると述べ、それが現実の社会的諸関係のイデオロギー的反映(あるがままの社会的交換の完全な縮図)であると攻撃する。しかし、恐らくは、彼はコミュニケーション研究の戦略的位置と、コミュニケーションの現状についての認識とを混同しているであろう。
- (J. Baudrillard, Pour une critique de l'économie politique du signe, Gallimard, 1972. pp219-223)
- 19) Claude Lévi-Strauss, La Notion de Structure en Ethnologie, in Anthropologie Structurale, Plon 1958. p326, 川田順造訳「民族学における構造の観念」『構造人類学』所収 みすず書房 1972年 324頁
- 20) 蔵内数太, 「社会学の視野について—時間と社会—」『蔵内数太著作集』第5巻, 関西学院大学生活協同組合出版会 1984年 259頁
- 21) Lévi-Strauss. *ibid.*, p.326, レヴィ=ストロース, 前掲訳 325頁(ただし挿入は筆者)
- 22) Lévi-Strauss. *ibid.*, p.326, レヴィ=ストロース, 前掲訳 325頁

- 23) Lévi-Strauss. *Ibid.*, p.327, レヴィ=ストロース, 前掲訳 326頁
- 24) Lévi-Strauss. *Ibid.*, p.327, レヴィ=ストロース, 前掲訳 326頁
- 25) Lévi-Strauss. *Ibid.*, p.327, レヴィ=ストロース, 前掲訳 326頁
- 26) Lévi-Strauss. *Ibid.*, p.329, レヴィ=ストロース, 前掲訳 328頁
- 27) これについては、ヤーコブソンの著作に対するレヴィ=ストロースの序文(「音と意味についての六章」みすず書房)や、ヤーコブソン夫妻の対話(Dialogues, M.I.T. Press, 1983)など参照
- 28) ヤーコブソンの用語は、ソシュールの *Sémiologie* ではなく、あらゆる記号をそのうちを含むという意味で、C. S. パースを継承して *Semiotics* である。(上記 *Dialogues* 参照)
- 29) Roman Jakobson, *Linguistics in Relation to Other Sciences*, in *Selected Writings II*, Mouton 1971. p666, 八幡屋直子訳「言語学と隣接諸科学」『一般言語学』所収 みすず書房 1973年 238頁
- 30) Jakobson, *Ibid.*, pp673-674, ヤーコブソン前掲訳 247頁
- 31) T.A.シービオク, 「一万年に橋かけるコミュニケーションの方法」『自然と文化の記号論』所収 勁草書房 1985年 130~131頁
- 32) Georges Mounin, *Dictionnaire de la Linguistique* PUF, 1974
- 33) エドムント・フッサール, 『論理学研究』第2巻 一. 表現と意味 みすず書房 1970年 31~116頁
- 34) Charles Sanders Peirce, *Collected Papers*, Harvard Univ. Press. の諸論稿. 中でも, *Questions Concerning Certain Faculties Claimed For Man* 1868. 山下正男訳「直観主義の批判」, *Some Consequences of Four Incapacities* 1868. 山下正男訳「人間記号論の試み」, *What Pragmatism is* 1905. 山下正男訳「プラグマティズムとは何か」など参照, はいずれも『世界の名著—パース・ジェイムズ・デューイ』所収 中央公論社 1968年
- 35) C.S. Peirce, *What Pragmatism is*, in *Collected Papers V*, p281 前掲訳 230-231頁
- 36) Roman Jakobson, *Linguistics in Relation to Other Sciences*, in *Selected Writings II*, Mouton 1971 pp.662-663. 八幡屋直子訳「言語学と隣接諸科学」『一般言語学』所収, みすず書房 1973年 234頁
- 37) D.Halberstam, *the Power That Be* が「メディアの権力」と訳されてベストセラーになったのは記憶に新しい。(サイマル出版会)
- 38) レイモンド・ウィリアムズ『キーワード辞典』晶文社 1980年 239-240頁
- 39) レイモンド・ウィリアムズ 前掲書 240頁
- 40) 中井正一, 「物理的集团的性格」『中井正一全集』第三巻, 美術出版社 152-163頁. また拙稿「知の取り扱いについて—中井正一覚書」関西学院大学 社会学部紀要 32号 1976年など参照
- 41) 柏木博, 『道具の政治学』冬樹社 1985年
- 42) Karl Polanyi, *The Semantics of Money-Use*, in George Dalton (ed.) *Primitive, Archaic and Modern Economies*, Bacon Press, 1968. pp175-203.
- 43) Talcott Parsons, *On the Concept of Influence*, in *Sociological Theory and Modern Society*, Free Press. 1967, pp355-382.
Talcott Parsons, *Social Structure and the Symbolic Media of Interchange in Social System and the Evolution of Action Theory*, Free Press, 1977 pp204-228など参照

- 44) 拙稿「メディア論序説」関西学院大学 社会学部紀要 48号 1984年を参照
- 45) マーシャル・マクルーハン, 『人間拡張の原理』竹内書店新社 1967年, 32頁
- 46) Roman Jakobson, Language in Relation to Other Communication Systems in Selected Writings II, Mouton 1971, p702. 米重文樹訳「他のコミュニケーション体系との関係における言語」『ヤーコブソン選集2』所収. 大修館書店 1978年 140頁
- 47) 例えば, ヤーコブソンの7巻, 5000頁に及ぶ選集の中で, メディアが索引項目に挙げられているのは, 第2巻の中のただの1ヶ所である。
- 48) Thomas.A.Sebeok, Semiotics : A Survey of the State of the Art, in Contributions to the Doctrine of Signs, University Press of America. 1985 p37
- 49) たとえば, 同じ視覚記号, 画と文字とがどのような意味空間と関係するかについては, ミッシュェル・フーコー, 『これはパイプではない』(哲学書房 1986) また, それに於いての拙稿参照 (『文始』第1号, 『文始』同人刊, 1987).

Summary

This paper presents the outline of the theory of communication. By communication is meant the exchange of message, and the communication study is the exploration in signs.

Since a sign becomes what it is only when it is perceived and manipulated by the human being, the essence of communication consists in the fact that the human being is constructed by its body. The sign defines the realm of the inter-personal communication on the one hand, and the intra-personal communication on the other ; i.e. there are those signs used with media and those used without them. Accordingly, the sign can exist by itself, but the medium cannot exist apart from the sign which makes it a medium.

The general relationship between the sign and the medium is stated above. The medium as well as the sign is to be classified according to its relationship with the human body. In other words, it mediates the social space within which the sign can function on three different levels : the human bodiliness itself, its body, and the objects around it.

正誤表

ページ	誤	正
16 頁 9 行目	ジ <u>ユ</u> ルジュ・ムーナン	ジ <u>ヨ</u> ルジュ・ムーナン
18 頁 (註 4)	Symbol, Reality, and <u>Scoiety</u> Symbol and <u>Soiety</u>	Symbol, Reality, and <u>Society</u> Symbol and <u>Society</u>
19 頁 (註 10)	Cours de Linguistique Gén <u>é</u> nale	Cours de Linguistique Gén <u>é</u> rale
20 頁 (註 34)	はいずれも……	邦訳はいずれも……
20 頁 (註 42)	The Semantics of <u>Mony</u> - Use	The Semantics of <u>Money</u> - Use
20 頁 (註 49)	それ <u>に</u> に <u>い</u> ての……	それ <u>に</u> に <u>つ</u> いての……